

ベルクソン紹介 第5回

「精神のエネルギー」を読む



2016年3月16日

野口幹夫

序 開かれた哲学

2004年の三水会で第1回の「笑い」からはじめたベルクソンの哲学の紹介は、今年まで10年かかって今回で終わりに来た。(巻末註)。

ベルクソンは一言で言って「いのちの哲学」である。かれは「いのちの流れ」を、宇宙の始まりから人間の精神の開花に至るまでの全過程を素描した。しかしそれは完結したものではない。ベルクソンの哲学は未来に開かれたものだ。

未来に開かれた哲学というのは、二つの意味がある。その第一は彼自身が言っているように、哲学というものは、科学と同じく、また科学の影響を受けて、絶えず発展する知見とともに、哲学もまた発展していかなければならないという意味だ。彼のいのちの哲学は、彼の時代つまり20世紀の初頭までの科学の尖端を踏まえていて、かつそれを乗り越えて、驚くことに20世紀の後半の科学がやっと到達した視野まで持っていた。ベルクソンは哲学が、科学や社会の歴史と両輪で進歩する姿こそあるべくものとしていたのだ。

「未来に開かれた」には第二の意味がある。それは今回「精神のエネルギー」で紹介するテーマそのものだ。これまでのテーマについての彼の論究の進め方は、まずそのテーマに関するこれまでの哲学を紹介しその批判の上に自論の展開を行って、それなりに完結した形をとっている。しかしこの「精神のエネルギー」については、彼はいわば序論として、その探索の可能性とふさわしい方法論を示唆するにとどめ、その先は未来の探究を未来の人類に託したのである。これからの人類が決して避けることなく真剣に取り組むべきテーマであることを示唆して終わっているのだ。

自分にとっても、このテーマはベルクソンに始まり、彼を越えていくべき今後の最大のテーマである。したがってこのテーマの報告は1回で終わ

らない。第1回はベルクソンの本文の紹介とその時代背景をのべるが、続けて第2回はベルクソン以降、現代にいたるまでのこのテーマに関する探求の成果と展望を報告したい。

第1章 「精神のエネルギー」の紹介*1

他の主著と違って「精神のエネルギー」として出版された書は、7つの独立した小論文や講演を集めたものだ。その中のどれにも、単独に「精神のエネルギー」と題したものは無く、包括してこの名前が付けられたものだ。この7つの小文の配置は、ベルクソン自身によってなされたもので、そこには意味がある。

始めの3つは講演の記録で、それらは1911年から1913年までの短期間に行われている。場所と対象は違っても、すべて哲学の専門家対象ではない広い聴衆を前にして語りかけているという特徴がある。他のベルクソンの主著はすべて哲学者も対象にかかっていることと比較すると、この講演集は比較的理解しやすいのはそのような性格のためだ。

またこの1911~1913年という年は、ベルクソンの人生にとっても特徴的な時期にあたっている。1900年コレージュ・ド・フランスの教授となってその名声を確実なものとし、1907年には最大の主著『創造的進化』を完成させて大きな山を越えた時期にあたる。またこの3つの講演の直後の1914年にはベルクソンはフランス政府の道徳・政治科学アカデミーの議長に選ばれ、フランスの知的人材のトップとしていやおうなしに政治に巻き込まれていくのである。時はまさに世界は第1次大戦に向かって歴史が大変革に向かう時であった。

いわば、彼の人生のはざまとか、句読点の様な時期に彼は憑かれたように、あるテーマで民衆に語りかけたというのが、これら3つの講演集

なのだ。それを続けて読むとある鮮明な意図を感じるし、この後の遺作となった大著「道徳と宗教の二源泉」においてさらに深く掘り下げられるテーマにつながっていく。

この3つの講演集がこの書の主要なものであり、後の4つの論文は、この3つの講演の前に専門雑誌に発表されたもので、明らかに論調が異なり、特定の細かいテーマに絞られており、この3講演集のテーマへの下準備であるといってもいいであろう。そのような構成のため、ここではまず主要な3つの講演集を詳しく紹介し、後の4つの小論文は簡単に要約で紹介するにとどめる。

第1講演 意識と生命

(1911年5月イギリスバーミンガム大学でのハクスリー記念講演)

いのちの問題は何らかの原理から演繹して答えがでるものではない。経験によるさまざまな領域にさまざまな事実のグループがあり、それだけでは答えはないが、それを見つける方向を示している。方向がいくつも示されるとすれば、それらの方向が同じ1点に集中していれば、そこに求めているものが見つかるようなものだ。今持っている事実の系列はまだ必要なところまで届いていないが、共同の努力によって、実証科学と同じようにこれについての哲学も進歩するだろう。

精神はまず意識から始まる。そして意識は記憶に結びつく。また意識は未来の予測である。生活に対しての何らかの注意が意識であり、意識はいうなれば過去と未来に渡された橋である。

意識のある存在とは何か。神経中枢のあるものだけに意識があるとするのは誤りだ。単純な神経系のみを持つ生物もあれば、さらにはそれも未分

化の原生生物にも意識はある。生きているものすべてに意識はある。多くの植物のように自発的な運動のない生物の意識は眠り込んでいる。自由な活動に向かっているときはその活動は高まる。生命は躍動する。物質環境と戦いつつ、物質を利用しながら、人間にまで進化した。「歓び」を持てるようになったことがその勝利と成功のしるしである。それは創造の歓びである。すべての人間にとって、自己による自己の創造、内部を豊かにし、人格を大きくすることである。

さらにその中でも最も優れた人々は、生命の運動の前進を続け、人体という芸術作品を乗り越えて、道徳的な生命の限りない創造的な流れを生み出した。人類のすべての人々を高めるために。

人間の心的活動は脳の活動を越えている。脳は運動的な習慣を蓄積するが、記憶を蓄積するのではない。思考も脳から独立している。そのことから人格の保存、その強化も、身体がなくなった後も可能でありうる。

意識は、人間に達する間にこの世で物質を通過していく間に鍛えられて、もっと効果的な行動のために、もっと強い生命のために、備えていると推測できる。死後の精神の生命は、やはり闘いの生命として、創造的な進化として思い描くことができる。しかしこれについては、我々は無知である。しかしその無知は決定的なものではない。意識に来世があるならば、それを探る手段がやがて見つかるはずである。かつては、知りえなかった惑星の外の星の元素組成も今はわかるようになったのだから。

第2講演 心と身体

(1912年4月「信仰と生活」での講演)

こころと身体の結合と分離は経験の事実だ。身体は物質と同じ法則にし

たがうが、意志的な運動は別だ。自由に動く原因は「我」にある。我とは自分の身体から、空間的にも、時間的にも越えている。知覚は身体を越えて星まで広がっている。身体は現在の時間と空間に限られた存在だが、心は、これからあふれ出している。

これに対して所謂「科学」の名で反論がでる。こころは脳の一部の運動に過ぎないと。その主張は「科学的」ではない。物理現象を要約した「エネルギー保存の法則」は意思による自由な運動の創造には当てはまらない。命の本質は、物理的法則に従うだけの物質を、自分の目的のために転換することにあるからだ。

自由意志は、繰り返しの効く運動だけを扱う物理の手法では、あつかえない。

経験的に、魂が身体につながっていることは事実だ。実験と観察の科学によっていえることは、脳と意識の間には、ある種の関係が存在するということだけだ。こころの動きが身体に行動を促すとき、たとえば言葉を発するとか身振りをするとかに応じて脳は活動する。しかし思考は脳から独立しているので、逆に脳は、精神と、身体の実実との接触を絶えず維持する役割を持っている。

言語の記憶と脳の関係は、病理的にも解剖学的にも研究が進んだ。脳が関係する場所も判明した。心体平行説の有力な証拠となえた人もいた。しかし失語症の実際は、まず固有名詞が失われ、次に普通名詞へいくが、動詞は最後まで失われない。このことは脳に語の記憶が収容されているのではなく想起の機能が、つまり言葉の動作の機能がおかされるだけということを示している。言葉の記憶は脳にはないことが証明されたことになる。記憶は精神の中にある。精神は意識であり、まず記憶だからだ。

心体平行論のように、脳と心の間に等価関係があるとすれば、意識は脳の運命に従い、死はすべての終わりということなるが、経験はその反対で

あり、魂の残存を肯定することになる。

魂の生をそのすべての表れにおいて研究するのは哲学の課題だ。

いのちの哲学は、経験から推論される確実な蓋然性の増大の中ですかし
づつ確実性へと導くであろう。

第3講演〈生きている人のまぼろし〉と〈心霊研究〉

(1913年5月ロンドン心霊研究会での講演)

ロンドン心霊研究協会の議長として招かれたことを心から感謝している。多くの偏見と闘い、嘲笑を撥ね返してこられたこの協会の勇気を称える。心霊科学に対する偏見、科学の名において非難しているのは本当の科学者ではない。

偏見を持つものには、ある無意識の哲学がある。それは対象となる現象の研究方法が、自然科学が用いる方法ではないことに、不愉快を感じるのである。テレパシーが現実のものであれば、それは自然現象のようにすべての人に際限なく現れるべきものだ。それは物理科学のように研究されるべきだと考えるのだ。

しかし現在、心霊研究は文献調査や証人調べのような手法で行われている。この協会で行われた長年の膨大な調査結果は、テレパシーの存在を確実なものとするに至っている。それは数学的な確実性のもではないが、少なくとも歴史や裁判の場合に得られた確実性と同じものだ。

自然現象ならば実験室で観察されなければ科学的ではないとし、また具体的なものに対する軽蔑がある。具体的な経験を抽象化して数値で表し統計処理できるようにしなければ科学でないと考えるのだ。

しかし精神的なものの本質は計量にゆだねることができないところにある。

テレパシーが誰にでも行えないというのは、それが微弱すぎて、特別な能力がないととらえられないのかもしれないし、また脳のメカニズムに抑制機能が働いているからかもしれない。それを証拠立てる記憶の例をあげよう。

記憶を呼び戻すのは生活に役立つものだけであるが、それは精神が生活に向かって緊張している時であって、死に直面した人が一瞬にして過去全体の記憶をパノラマのように見るという経験が多くある。それは生に対する緊張が薄れれば、記憶のすべてがよみがえるということを意味している。

同じように我々は生活に必要なものだけを知覚しているが、実際は潜在的にはもっと多くの知覚が行われている。行動に適さないものは意識から遠ざけているのが脳の役割なのだ。それは記憶の利用と同じである。例外的な状況や特別な素質のある人間においては、普通は、無意識のうちに失われる知覚が、意識の中に入ってくることもありうるのではないか。そのような知覚があるならばその究明は心霊研究が力を発揮する。

体は空間に縛られているが、意識が空間を越えた交流をしているとしても、それは日常生活には邪魔になるから無意識の中に捨てるメカニズムが安全弁のように脳にはあるのかもしれない。その抑制装置が働かない場合境界を越えることは大いにありうる。ここでも心霊研究が力を発揮することになる。

先に述べたように、肉体の滅びた後に魂が生き残ることは自然なことだとすれば、心霊研究は非常に広い領域が開かれている。数学や物理が千年の歴史があり、化学が 18 世紀に登場した。心霊研究はまだ始まったばかりだ。・・・」

ここに詳述した前の 3 つの講演集が主要なものであり、以下の 4 つの論文は、この 3 つの前に発表されたもので、この主要論考への下準備であるとみられるので簡単に紹介しておきたい。

4 夢

(1901年5月心理学総合研究所における講演)

目ざめて生活に緊張しているときの記憶の呼び出しは、睡眠中の生活への無関心と弛緩状態における無秩序な記憶の呼び出しとは違う、夢を題材に記憶の呼び出し方を論じた。これが第2講演の心と身体につながっている。

5 現在の記憶と誤った再認

(1908年12月「哲学雑誌」に掲載)

デジャヴの現象を心霊的神秘的なものでなく、知覚と記憶の二重化する現象として解明している。その二重化はふつう無意識なのに、生活への不注意の状態で起きるとした。知覚と記憶の広さに関する所見。

6 知的努力

(1902年1月「哲学雑誌」に掲載)

人間精神が問題を解決しようとする時、ある意図をいだいてそれを実現するために具体的なイメージにすると、我々が行う知的努力とは何かを問うている。さまざまな意識記憶の平面とそれを横切る精神の動き、その意図を動的図式とし、さらにそこから具体的なイメージ生み出すことを行っている。そのことによって非物質的な精神から、物質化への動きを生む。

7 脳と思考—哲学的な錯覚

(1904年道徳形而上学雑誌に掲載)

近代科学が主張する脳と心の同等性説の誤謬を、観念論と实在論のあいだのすり替え錯覚として反論した論文。これを踏まえて1~2の精神の独立の考えにつながっていく。

第2章 ベルクソンの示唆

「精神のエネルギー」で示されたテーマは、彼の全哲学の中でも中核になるものであると私は考えている。しかし皮肉にもこの論究は、ベルクソンの名声を傷つけるものとして、一般の哲学者からも、さらにはベルクソン研究者の多くからも無視されているのが現実だ。そこで彼の全哲学をサマリーした上で、この論究が中核的位置を占めていることを確認したい。

- 1、彼の哲学は「いのちの哲学」である。いのちとは意識であり、記憶である。生きものは、もっとも単純な生物でも、食べ物を選択し摂取するために意識をもち、記憶する。(物質と記憶)
- 2、いのちは宇宙のはじまりから創生した。いのちに内在する推進力「エランビタール」によって進化し、あるものは停滞していった。そのいのちの飛躍の最高段階の人間は「精神」を得た。「いのち」の最初の起原からわれわれの時代にいたるまで、唯一の衝動、恐るべき推進力に従って人類全体は驀進する。そのめざましい進撃は、あらゆる抵抗を撃破し、幾多の障害を、おそらくは死をさえも、克服することができよう。(創造と進化 エランビタール)
- 3、人間の精神は、さらに進化を進めるであろう。戦いから愛へ、楽しみを求めるものから喜びを知るものへ。閉じた社会・魂から、開かれた魂・社会へ、そして新しい人間種への飛躍をなしとげるであろう。
(道徳と宗教の二源泉)
- 4、精神は、肉体から独立している存在だから、肉体の消滅によっても共になくなることはない。来生を含めた人間の精神間の感応は存在する。人間がもつ未知の能力の可能性を否定してはいけない。(精神のエネルギー)

5、精神の科学が新人種への道を開く

人間は科学技術の進歩によって、物質的基礎を人類は充分得た。その力にふさわしい精神的エネルギーを人類が持つとき、人類はいわば新しい種、さらに言えば、動物種としての存在から開放されることになる。その引き金を引くのは新しい精神科学であろう。物理・化学は、物質の探求で奥深い成功を収めつつあるが、その手法では人間の精神の探求は行えない。それにもかかわらず、精神世界の探求を非科学的と決め付け、学問の世界から排除している。そのため例えばテレパシー現象など、多くの実証的データがあるにもかかわらず、あたまから疑いの目で見られ、研究は進まない。それでも勇気ある人々によって、精神科学は端緒につき、この知られざる大陸のほんの一部をうかがえるようになった。「この未知の世界からの微光がわれわれへまで届いて、この肉の目にも見えたでしょう。そうなれば、ただ目に見え、手で触れるもののみを、存在するものと考え習わしてきた人類に起きる変化は、いかばかりであろう。」

大部分の人にあつて素朴に信じられている死後のいのちについての漠然とした思いが、この精神科学の新たな発見によって人々の確信となりさえすれば、人間は今のような快樂にかじりつくことはないだろう。

それは、人間種にふさわしい精神のエネルギーを与え、その時人類は新しい種に飛躍することだろう。 （道徳と宗教の二源泉）

ベルクソンの哲学のすべての流れの決着が、人間の精神の開花を目指しており、それが死後の魂の存続の信念によって支えられることを示唆している。「精神のエネルギー」に収められた3つの通俗講演がその精髓を語っているのだ。

第3章 3つの講演の1910年代は大転換期であった。

ベルクソンが3つの講演をした1910年代の初め、彼が懸念したことがまさに起きていて、もはやとどめようもない潮流になりはじめていたころであり、それは現代まで続いているといえる、ある巨大なターニングポイントの時であった。

何のターニングポイントであるかを理解するためには、その前後のある潮流を説明しなければならない。

それは人類がこの時期を機に、その後の100年間、それまでは人類が失うことのなかった超越者への畏敬の念を全体として失い、それどころかそれを軽蔑した時期が現出し、現代もそれが続きつつあるということなのだ。

さらに言えば、その前の一世紀に驚くべきことが世界に起きていたのだ。それは、あたかもその喪失の危機を迎える警告を発しているかのように、超越世界からのさまざまなメッセージが発せられ、世界各地でそれを受けとめる事件が発生したのだ。それまでは何世紀に一度といった頻度で、偉大な宗教創始者が現れ、彼を通じての超越者からのメッセージを人類は受けることができたものが、ごく普通の個人たちに、超越世界からダイレクトにコンタクトされ始めたかのようにであった。人類のある成熟を見極めて、あるいは見切りをつけて、超越世界が判断したかのようにである。

現代人の我々からは忘れ葬り去られ、今聞いても迷信と一笑に付されてしまうような心靈現象の数々が、その歴史的な100年に発生し、それをめぐる賛否両論が、全世界に吹き荒れたのだ。それは突然の奔流のように起き、あたかも高次の世界が、うつせみの世を揺り動かすべく、一斉に仕掛けたかのようにであった。一九世紀の前半から20世紀のはじめにかけてのことであった。

日本では、後に天理教や大本教として知られる神道系の新興諸教団の源

流となる神からのお告げが、名もなき老人老女たちにもたらされた。

欧米ではアメリカのニューヨーク州の片田舎のポルターガイスト現象に始まり、リンカーン大統領を巻き込んだ。そこから、フランス、イギリスに波及し、ヴィクトル・ユーゴは膨大な霊界通信記録を残した。イギリスでは、当時の先端的な物理学者や超一流の小説家・哲学者・政治家がその騒ぎに巻き込まれ、それを学問の目で確認しようとする組織ができた。

スピリチュアリズムという新しい信仰宣言が高らかに述べられたが、たちまちに既成の宗教集団からなどの非難の渦に巻き込まれた。

しかしやがてそのにぎやかな潮流は電気の普及とともに変わり目を迎える。ろうそくの薄暗い夜の空間が、徐々に電灯によって昼のように明るくなった。電灯や無線通信に象徴されるような電気を中核にした科学技術が一斉に花開いてくる。

薄暗さの中で、またまだまだ信心深い人々の精神の中で、驚異のまなざしで見つめられた各種の心霊現象は徐々に疑いの目で見られるようになった。見えないもの、科学的でないものは迷信として迫害され、葬り去られるようになった。第1次・第2次と続いた世界大戦、そのための急速な技術開発、エネルギー開発など、現代につながる唯物論的諸思潮が澎湃として世相を支配する時代、心霊研究は、その前にいかんとすることもなく崩壊の危機に瀕していった。ベルクソンは、これまでの名声を失う危険を冒してでも、心霊学会会長を引き受け、最高の哲学的な知性をもって、心霊現象の冷静な研究の重要性を訴えたのだ。

この講演の前の100年をふり返ってみよう。

4-1 日本の江戸末期の神霊現象

日本でも江戸時代の末期にあたる19世紀、神のお告げを直接受けたという人が次々に現れ、病を癒し、いろいろの苦しみを助ける奇跡を起こした。彼らは弾圧を受けることも多かったが、今も繁栄する神道系の新宗教をつくりあげた。日本で同じような新興宗教の発生があったのは鎌倉時代の新興仏教である。日蓮宗、親鸞の浄土真宗、道元の禅宗が生まれた時代であるが、これらはいずれもルーツは中国にあり、それに我が国独自の接ぎ木がなされて成立したものだ。しかし19世紀に起きた新宗教はこれとは違い、名もないあるいは無学の老女などが「神からの啓示を直接受けた」というものであり、米欧で起きた心霊現象と時期も現象も共通するものがある。それ故この中の一つ大本教に触れかつ、世界の心霊運動とも結びついた英文学者浅野和三郎も出たのである。これに該当する黒住教、金光教、天理教、大本教の4つの神の啓示について紹介する。

黒住教

教祖神・黒住宗忠は、代々今村宮（岡山市北区今）の神職。33歳の時、両親が流行病によりわずか1週間の内に相次いで亡くした。宗忠自身も肺結核に侵され、2年後には明日をも知れない状態に陥った。死を覚悟した宗忠は、文化11年（1814年）1月の厳寒の朝、毎朝のように手を合わせ日の出を拝んだ。この“最期の日拝”の祈りの最中に、新たな“生”への祈りに転回した。冬至の朝昇る朝日に祈りを捧げていると、天照大御神と神人一体になり、悟りの境地に立った。宗忠の死後、安政3年に神祇管領長上・吉田家より「宗忠大明神」の神号を与えられた。明治9年（西暦1876年）独立し、神道黒住派と称す。以降の近代神道運動のさ

きがけとなった。今日、神道系の新宗教で一般的になっている主神（すしん。宇宙主宰神）という考え方の嚆矢でもある。天理教、金光教、大本教、生長の家、等、後の新興宗教の走りであるといえる。

金光教

金光教の教祖「金光大神」は、46歳のとき（1859年・安政6年）神から、家業である農業をやめ、人の願いを神に祈り、神の願いを人に伝えて、人を救い、神を助けてくれる「取次」を頼まれた。

人を助けずにはおかぬという天地の親神の切実な願いを身に体し、神と人を結ぶ「取次」によって、神も助かり人も立ち行く世界を開いた。

金光大神は、「生神ということは、ここに神が生まれることである」と語り、生神とは、特別の人のことではなく、信心すればだれでも生神になることができ、人の心の中、働きの上に神が生まれる。天地金乃神は、神の思いに沿わない人間を切り捨てるようなことはしない。神が人と離れて存在するのではなく、「人間がおかげ（神の助け）を受けてくれなければ、神も金光大神も嬉しくない。この金神は、仏もキリストもいとわない。みな神の氏子だ、」という。

天理教：

天保9年（1838年）10月26日、大和の庄屋中山善兵衛の妻みき（41歳）は、神の啓示を受け、みきの体に、世界と人間を創造した神様である親神・天理王命が入り込んだ。以来、教祖（おやさま）は人々に教えを説き、自ら人をたすける手本を示した。人々の病気を治すなどの奇跡を起こし、近隣の住民の信仰を集めた。地域の寺社から疎まれ、さらに教祖は逮捕・拘留されるなど、幾度となく官憲から弾圧を受けた。教祖

が90歳を迎えるころ、迫害干渉は激しさを増した。そして明治20年（1887年）現世での姿を隠した。しかし、教祖はいまも存命であり、世界中の人々が仲良くたすけ合って暮らす「陽気ぐらし」世界の実現に、働いていると信じている。1885年（明治18年）「神道天理教会」として認可された。

大本教

1892年（明治25年）京都府綾部の、霊能者出口なおに、「うしとらのこんじん」と名乗る神が憑いた。彼女には神示が、お筆先（自動筆記）という直接内流によって伝えられた。1898年（明治31年）出口王仁三郎が彼女と出会いその養子となり教団組織を作る。やがて戦前の日本において、有数の巨大教団へと発展した。出口王仁三郎には、瑞霊系の神懸りによって、神示が直接内流として伝えられて、『霊界物語』の口述が開始されることになった。宇宙万物を創造された主神の愛善にもとづき、人心の利己主義と弱肉強食を克服した地上天国建設を目的とする。またすべての宗教は究極の实在（一つの主の神）から出ている“万教同根”の真理に基づき、各宗教が大和するよう働くとする。戦前、天皇制に反するとして二度の弾圧を受け、組織と施設に潰滅的な被害を受けた。大本教の信者に海軍教官の浅野和三郎や後の成長の家の谷口雅春がいた。

以上、江戸末期から明治初期にかけて、つまり1850年代から世紀末にかけて次々に神のお告げを聴いた人たちが起こした信仰集団の信仰は、勢いがあった。そしてその信条は、神道とはいえ、ナショナリスティックなものではなく、世界的でむしろ宇宙的であって、基本の人生観の明るさに驚く。それ故にこそ、今も様々な分派を作りながら、日本から始まり、世界各国に布教を成功させているのだ。

4-2 アメリカでの発端*2

欧米での怒涛のような心霊現象運動の発端はアメリカ東部ニューヨーク州で起きた。靴屋の徒弟だったアンドリュー・J・デイヴィスは小学校だけの無学な青年だったが、子供の時から、時にある特殊な心理状態におちこみ、また不思議な声を聴いたりする特異な能力を持っていた。17歳の時、催眠術に関する講演会に、洋服屋の仲間といっしょに参加したのかきっかけで、それ以降この二人で組んで様々なことを始めた。催眠をかけて入神状態になるとデイヴィスには人体の透視ができる能力ができるのを利用して、病気の相談や治療を行ったのである。

そんな彼が1845年入神中に知らないが恐ろしく博識の人に出会い、その人からの知恵の伝授をうけてそれを口述し始めた。それを周りの人が筆記した大部の著作「自然の原理—その聖なる啓示と人類への声」を完成させた。無学の靴屋の徒弟が到底現せない高度で説得力を持つものであり、続編も合わせて3部作が発刊された。

そんな彼に1848年3月31日こんな出来事が起きた。「今朝明け方に私は暖かい息を顔に感じ、やさしい声が強い調子でこういうのを聞いた。『兄弟よ、よい仕事が始まった…見たまえ、生のままのデモンストレーションが始まったのだ。』これがどういう意味なのか、私は考えざるをえなかった。」

生のままのデモンストレーションという言葉は「自然の原理」の中ですでに述べていたのだ。「肉体の中にある霊と、より高い世界にいる霊とが交信する。間もなくそれは生のままのデモンストレーションの形で行われるであろう。」と予告していたのだ。

そしてまさにその日アメリカを揺るがす事件が同じニューヨーク州の別のところハイズヴィルという小村で起きた。後に「フォックス家のボル

ターガイスト現象」と呼ばれた事件だ。この家の人々に呼びかけるような音が鳴り、若い娘がそれに応じたところ、なにかの霊的存在が呼びかけていることがわかり、やがてそれが、かつてここで殺された行商人の霊であることが判明した。それは、家族だけでなく、驚き集まった村人たちの前で起きたのだ。

この叩音は始め問いかけにイエスは1回ノーは2回で答えよといった簡単なものであったが、やがてその回数にアルファベットを当てはめるという約束事を霊との間に取り付けることで、一挙に通常の意味疎通ができるようになった。この方式は、ここから始まり、この後アメリカやヨーロッパに心霊現象が起きるところに広く使われた。英語フランス語などヨーロッパ語がアルファベットを共通にしていることもあるが、霊界でその方法が共通化されるような連絡が取られているかのような不思議さがある。

このフォックス家の少女たちは、後に都会に出ても、霊界との交信ができる能力を持ち続けたため一躍有名になった。また彼女たちの活躍に刺激されて、同じような霊的能力をもつ人たちが次々に現れた。それを予告した先のアンドリュー・J・デイヴィスの驚異の本も識者の絶賛を浴び30年に亘る大ベストセラーになったのである。

明確な証言が残されていることだが、リンカーン大統領はこの運動に共鳴して霊媒能力者を重用し、南北戦争の終結を待たずに、奴隷解放宣言を先行して発表したのは、霊からの進言によるものでそれは戦争終結を早めたとされている。

4-3 ヴィクトル・ユーゴの心霊交流*3

叩音による意味疎通は、イエス・ノーだけの交信ならば問題ないが、アルファベットに置き換えて文章を聴きとるとするのは大変困難な作業だ

が、それを毎晩深夜明け方まで2年間やり続けて膨大な記録をのこしたチームがいる。フランスの大作家ヴィクトル・ユゴーとその家族たちだ。

ヴィクトル・ユゴーはすでに国民的作家となっていたが、ナポレオン三世が共和制の中で大統領に選ばれていたにもかかわらず、クーデターを起こし、共和制を停止し帝政をひいたのに反対し、抵抗運動の末身の危険を感じて、1853年英仏海峡のジャージー島に亡命した。

この孤島の海岸沿いの邸宅に落ち着いた後、間もなくフランスから女流作家デルフィーヌ・ド・ジランダンをお客として迎えた。彼女はパリ社交界の華と謳われた才媛で、当時パリで大流行だった降霊術をもちこんだのだ。

それは大きなテーブルの上に小さな三脚の丸いおもちゃのテーブルを置くだけの舞台であった。テーブルの周りにユゴーの家族・友人とジラルタン夫人が座った。日曜日の夜のことであった。しばし沈黙のうちに丸テーブルが震え始めた。そしてジラルタン夫人の「お前は誰？」と問いかけに足を1本持ち上げた。「何か嫌なことがあるの？もしあるのなら1回こつんと叩いておくれ。ないのなら2回叩いて」テーブルは1回こつんと叩いた。そこから会話が始まる。問いかけは言葉で、相手は足の叩音で答える。その叩く回数をアルファベットに対応させるというルールはすでにアメリカやパリで流行していたため、ここでは説明の必要もなく会話が始まったのだ。たわいない応答が続いた後、初めは疑っていた参加者も真剣になって没入したころ、そのテーブルに出ていた相手が10年前に舟遊びの事故で亡くなったユゴーの愛娘レオポルディーヌであることが分かり、遊戯の場のつもりであったのが、一挙に驚愕の場となったのだ。レオポルディーヌはもうこのような場に出て来ることはないと言って去ったが、その晩以来テーブルとして出てくる相手は次々と替わり、この島を去る2年の間毎晩このチームは根気強く対話を続けた。モールス信号のようなアルファベット通信は解読するのは恐ろしく集中力を要するし、深夜から明け方

で続くことも多く、終わると疲労困憊してしまった。それを続けたのはこの対話がいかにアトラクティブであったかを示している。異界の相手もまた述べたい意志をアルファベットにし、さらにそれを叩音の回数に変換してテーブルを動作させるというのは神業だ。彼らは毎晩、替わって訪れた。例えばシェクスピアが現れて、詩作を共にしたこともあった。さらには劇や詩の魂といった抽象的なものや、彫刻のライオンまで登場する。最後にはテーブルがその脚につけた鉛筆で画まで書いたのだ。ユゴーやその秘書役がこれらを丹念に記録し4冊のノートに残された。ユゴー全集の第9巻に収められて、我々も読むことができる。

このようなテーブルタッピングによる降霊の愛好者はこの1850年代にアメリカで300万人以上、パリでもすべての社交場の夜、人々はテーブルに真剣に向き合った。朝の挨拶は「昨夜のテーブルのご機嫌はいかが？」とかわされたという。

4-4 イギリスの心霊研究*4

産業革命で先行し、パックスブリタニカの全盛を迎えていた英国は、ニュートン以来の科学のリーダーでもあり、王立協会という科学推進の中核組織もあった。その英国に心霊現象がアメリカから伝わったのは19世紀の半ばだ。伝えたのも社会の上層部からで、関心を持って受けとめたのも、一流の知識人であった。社会主義者のロバート・オーエンや、物理学者ウィリアム・クルックスなど名だたる知識人がいた。冷静な批判眼を持った人たちに迎えられたが、当然ながら心霊現象は信不信両論が渦巻いた。

英国らしい対応は、この心霊現象到来に一方的に身をゆだねることなく、それを科学の目で確かめようとしたことであった。まず1869年にはロンドンの学術団体の一つが調査委員会を立ち上げた、33名の科学者医師技術

者、弁護士、神学者など実力ある人々で構成された。1年かけて400頁に亘る膨大な調査報告書をまとめあげた。委員の多くは否定的な態度で調査を開始したが、この調査活動のなかで、態度を変えざるを得なくなり、ほぼ心霊現象の特異性を認め、結論的意見として、今後さらに真剣な研究に値すると提言したのだ。しかしながら、この研究の成果にたいする世間の批判は冷笑的なものが多く、それ以上の研究続行はできなかった。

しかし心霊現象をインチキとしてそれを暴こうとする人たちも、逆にそれを信奉する人達も側からも、盛んになる心霊現象を科学的に探求しようとする点では一致していた。そして1882年ロンドンで世界で初めての心霊研究協会（Society for Psychical Research）（SPRと略称）という恒常的な研究機関が設立された。主催者たちはこの研究会が信頼できるものであることを、まず世間に認知させなければならぬと考え、学会、政界の超一流の人物を会長に招いた。その多くは引き受けた。彼らが世評を恐れずにこの職についたのは、それほど身近に不思議な心霊現象を見せつけられる機会が広がっていて、証明されてはいないけれどその存在を無視することはできなくなり、その科学的根拠を求めたいとの願いが世間で認知されて、公的なものになっていたからに他ならない。

1913年にはベルクソンが招かれて会長となり、冒頭に紹介した就任演説をしたのであった。そのほかの著名人をあげると後の首相アーサー・バルフォア、電気学の創始者レイリー卿、同じくトムソン、ルイス・キャロル、ジョン・ラスキン、グラッドストーン、詩人のテニスン、作家コナン・ドイル、アフリカ探検のリビングストーン心理学者ウィリアム・ジェームス、カンタベリー大僧正などなど枚挙のいとまがない。彼らのバックアップを得て、協会は6つの分科会を作り、現象の事例を膨大に収集整理した。中でも想念の伝達すなわちテレパシーに関する部会は成果をあげ、「生者の幻像」という著作を出した。彼らは3万枚もの調査票を配布し700の事例

を集め、個々に調査の上、13件は事実であると判断したと紹介している。その事例のほとんどは遠隔の地での死に関する伝達であった。

ベルクソンの会長就任講演は、この委員会報告が出版されてから30年後のことになるが、彼が例題として取り上げて研究の必要を訴えた心霊現象も、これと同じような直近に死んだ人からの留守宅への伝達の事例であった。ベルクソンが講演した1914年のヨーロッパは第1次世界大戦が終わった直後で、戦場で命を失った戦士も多く、遠く離れた留守宅の妻にそのいまわの姿を伝えるという緊迫した状況が日常茶飯におきたようだ。この話を聞いた科学者が、その内容のリアルさに耳を貸さず統計処理をしなければ科学的でないとしたことにベルクソンは批判し、科学とは異なる方法からはじめることによってのみその研究を広げられると指摘したのだ。

心霊現象の大ブームに対して人々の対応は3種類に分かれた。*6

まずこれら心霊現象を、死後の生存を信じその霊界からの働きかけがあり、それを受けとめる能力のある人間がいるのだと素直に受けとめる人々だ。20世紀には激減したが、19世紀の初めには大多数を占めていた。

それに対し死後生存ということ信じない人たちがいる。そのような人々も心霊現象に対する対応はわかれた。

懐疑的ではあるが、繰り返し事例に接しているうちにそれらを事実としては認めるが、それらを霊界からの働きかけによって起きているという解釈は否定し、心霊現象は人間の深層心理や特異な未知能力によるものとする考えをとった。この流れはその後、超心理学として発展していく。

最後は一切の心霊現象を非科学的であり得ないものとし、不思議な現象には必ず意図的な不正があるはずと考え、霊媒とされた異能の能力者にたいして、その人格を否定するような厳しさで接したし、それに関連する研究テーマをタブーとしてすべての学会から放逐する動きをとった。

4-5 新宗教としてのスピリチュアリズム

先に述べたように英国の SPR による膨大な事実の収集と吟味によって死者からその縁者へのテレパシーは否定しえないものと認定された。その調査対象にはならなかったが、実際行われた異界通信の中にはもっと大規模で重要なメッセージがあった。それは霊界の姿や人間の死後の遷移の形や魂の成長についてそして人間の存在の意義まで、人間に教えようとするものだ。

先にも述べたがアメリカの A・J・デイヴィスは、極めて高度の知性からの口述筆記によって、「自然の原理—その聖なる啓示と人類への声」を完成出版した。そこには宇宙創成理論や太陽系の誕生のことが述べられていてそれらは 20 世紀になって宇宙科学の確立を待って完成した現代の宇宙観と狂いが無い。またイエスキリストを人間の子であり偉大な改革家であるとのべ、神格化したカトリックの伝承に誤りがあると述べている。1856 年フランス人アラン・カルデック（自身の本名ではなく霊界の伝達者の名前を名乗っている）が、多数の霊からの証言をあつめた「霊の書」を書き、多くの信奉者を作った。1872 年には SPR 創立者の一人ステイントン・モーゼスが自動筆記書「霊の書」を書き、1903 年にはすでに逝去した元 SPR 会長の F・R・マイヤーズが、死後彼が体験した霊界についての情報を、面識もないカミンズ嬢に口述筆記させた「人格と死後の生存」*8 が世に出た。

これらのメッセージの内容は異口同音に、人間存在の死後の継続と霊界における成長の階層を語っている。これらのメッセージを新しい時代の到来と受け取り、自らの信条として受け入れた人達をスピリチュアリストと呼び、その新たな信仰体系をスピリチュアリズムと呼ばれることとなった。1890 年から 20 世紀の初頭にかけて英国からはじまって世界的なスピリチュアリストの連合ができた。採択された綱領は次のようなものである。原

文作者はロバート・オーウエンである。

1) 神は万有の祖である。2) 人類は皆同胞である。3) 霊魂との交通及び天使の守護がある。4) 人間の霊魂は死後も存続する。5) 自己責任の法則が存在する。6) 地上の全ての善悪の行為に対し死後につぐないと応報とがある。7) あらゆる霊魂は向上する。

日本のスピリチュアリストの先駆は浅野和三郎*5である。彼は海軍兵学校の英語教師であり英文学者としても著名であったが、彼の妻が優れた霊媒としての性格をあらわし、彼女の守護霊である戦国時代の女性の人生を語らせた「小桜姫物語」を出版した。*7 縁があつて大本教に入り、教祖の出口なおに重用され、教祖の神霊からの自動筆記にあたる「お筆先」を解説した。やがて大本教が国家による弾圧を受けた後、欧米に渡り、勃興していたスピリチュアリズムを内部に入り調査した。帰国後の大正末期の1921年に日本の心霊科学研究会を発足させた。亡くなる3年前の昭和9年(1934年)に発表した「心霊科学から神霊主義へ」*5の中で日本流の神霊主義の指導理念をまとめている。その抜粋は次のようになる

1) 心霊現象は科学的事実である 2) 各自の個性は死後に存続する。3) 死後の世界は段階がある 4) 各自の背後には守護霊がいて本人と不離の関係をもつ。5) 自然霊が存在する 6) 最高の霊が宇宙神 7) 全宇宙は物心一如の大生命体である。

心霊現象のブームはベルクソンの死前後から急速に消えていった。世界は第2次大戦と戦後の米ソ対立の長い危機時代に入った。経済と科学技術万能の時代になり、無神論が世界を覆いつくした。しかし細々と心霊現象探究は続いていたのである。そして21世紀に入った今、新たな変化の時代を迎えているようにみえるのである。それを第2部で報告する。

第1部完

参考文献

- *1 多くの翻訳があるが、今回用いたのは平凡社ライブラリー原章二訳。アンリ・ベルクソン精神のエネルギー
- *2 近代スピリチュアリズムの歴史 三浦清弘 講談社 2008/4
- *3 ヴィクトル・ユゴーと降霊術 稲垣直樹 水声社 1993/3
- *4 近代スピリチュアリズム百年史 アーネスト・トンプソン著 桑原啓善訳 でくのぼう出版 2011/2
- *5 心霊科学からスピリチュアリズムへ 神霊主義 浅野和三郎 でくのぼう出版 2003/1 復刻再版
- *6 霊の探究 近代スピリチュアリズムと宗教学 津城寛文 春秋社
- *7 小桜姫物語—霊界通信 浅野和三郎 2003/7 復刻再版
- *8 永遠の大道 G・カミングズ著 浅野和三郎訳 潮文社 H22/11 復刻再版

巻末註 これまでの私の三水会でのベルクソン紹介経過

ベルクソン紹介 第1回 笑いについて（2004年1月）

ベルクソン紹介 第2回 ベルクソンの「いのちの理論」

“創造的進化—エランヴィタール”について（2007年7月）

ベルクソン関連 現代物理学と新しい哲学（2009年10月）

ベルクソン紹介 第3回 ベルクソンの精神についての哲学

「物質と記憶」を読む（2010年10月）

ベルクソン関連 「無」—逆転のシンボル（2012年5月）

ベルクソン紹介 第4回「道徳と宗教の二源泉」が現代に残したもの（2014年1月）

ベルクソン紹介 第5回「精神のエネルギー」2016年3月と5月